Title	現代社会におけるポスト合理性の問題 ： ヴェーバーの遺したもの（国際シンポジウム）
Author(s)	越智，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4：9-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2679
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

国際シンポジウム

現代社会におけるポスト合理性の問題
――ヴェーバーの遺したもの――

越智　裕子

2010年11月23日、聖学院大学総合研究所・聖学院大学政治経済学部の主催で、国際シンポジウムが開催された。

本講演では、「現代社会におけるポスト合理性の問題――ヴェーバーの遺したもの――」というテーマに基づき、まず、グラーツ大学名誉教授　カール・アッハム氏より「行為、歴史、および説明の原則としての合理性――マックス・ヴェーバーに関する考察――」が論じられ、次に、カッセル大学名誉教授　ヨハネス･ヴァイス氏より「カリスマ――社会学の境界線上で」が論じられた。また、各講演者へのコメントが、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授　姜尚中氏、大阪府立大学人間社会学部教授　細見和之氏、東京外国語大学、東洋大学非常勤講師　荒川敏彦氏、聖学院大学政治経済学部教授　土方透氏により述べられた。

ここでは、アッハム氏とヴァイス氏の講演内容を中心に報告したい。

講演１.「行為、歴史、および説明の原則としての合理性――マックス・ヴェーバーに関する考察」から

アッハム氏によると、ヴェーバーの唱えた「合理性」に対する社会学的な意義は、自然の科学的理解とその技術的支配を可能にし、やがて社会の科学的理解とその社会工学的な制御をも可能にし、この文化の成立過程を解明するための理論を示したことにある。

１.行為と言明の合理性について

合理性は、⑴行為（人間行動学的合理性）と、⑵言明（認識論的合理性）により説明がつく。⑴は、ある行為は、それが行為者によって追及される目的に客観的によく当てはまっている場合に合理的であるとされる。そして、ヴェーバーはこれを「目的合理性」「価値合理性」と論じていたが、彼は合理性を、目的ではなく価値に向けられた行為として示そうとしていた。⑵は、例えば、世界像や神話を合理的であると見解し、神話は論理的で、経験的に正しい言明だとはみなされないが、それは説得力と蓋然性を持ち、機能的解釈に基づくなら、合理的で自分たちの居場所が理解可能なやり方で象徴的に表現されているとしていた。

２.宗教の脱魔術化と経済的合理性について

ヴェーバーが示そうとする、世界の諸物に内在する神の理性を辿ろうとする試みは、長期的には信仰の内容から理解機能を切り離すという結果をもたらし、その過程で、世界だけでなく、生き方の合理的秩序の原理もまた、宗教的に正当化されるという変化に至った。一方、宗教を通して正当化されていた美徳は、自由という政治的イデオロギーによって正当化され、ヴェーバーの業績は、その差異を強調し、政治的自由、社会福祉と社会保障、科学の促進、民衆の教育と知識の普及などすべての進歩や寄与物となった。

３.科学の脱魔術化とその意味について

宗教は、救済という知識が、今までの世界内在的な進歩に取って替わられ、世俗化し、科学は、科学の意味価値が効用価値によって置き換えられ、科学や宗教は脱魔術化のプロセスとして進行した。そして、自然科学は、技術的に返還されたときに役立つ認識や自己像や世界像への貢献を通し、実存的な重要性を持つ認識を保証するようになり、大きな意味価値を獲得する。自分たちが宇宙のどこにいるのかを示し、人間が自らの行為に適切な方向づけを得ることを可能にする。

4.科学の合理的根拠づけを巡るいくつかの新たな試みについて

新たな試みとして２つの考え方がある。⑴機能主義的な「社会構成主義」と、⑵「言語ゲーム」理論である。⑴は、構成主義的見解の支持者は、知覚は解釈から独立してはおらず、解釈は種々の社会的利害の関心に条件づけられているということである。⑵は、「言語論的転回」は言語哲学を超え、人文科学や社会科学に浸透し、諸事実にはそれぞれ固有の概念枠組みが対応していると考える。全ての認識は、それによって確認された事実も、われわれ「言語ゲーム」の中で溶けあわされており、そこに基礎を持っていると考える。

5.道具的合理性と実質合理性について

合理性という概念には両義性があり、合理的、かつ経験的認識、つまり理論理性の内容に関連するかと思えば、規範と諸価値の認識、つまり実践理性の内容に関連もする。自然技術的に、および社会技術的な関連で応用される「目的―手段―合理性」、あるいは「道具的合理性」「実質合理性」から区別されるとしている。

講演２.「カリスマ――社会学の境界線上で」から

ヴァイス氏は、カリスマを説明する前に、キルケゴールの理論を含め、「例外」と「一般」について説明している。例外とは、卓越し、特別な才能を持っているものであるが、それは無条件に誰もが当てはまるものであるとの説明をしている。

次に、彼は、ヴェーバーのカリスマの問題を挙げ、彼は、ブルジョア・エリート的であるため反社会的であり、マルクス主義的批判がこの流れの中で展開されたと言及している。そして、ヴェーバーは、カリスマの傲慢さや、その演出の形式を一層鋭く批判している。つまり、知と道徳性の従来の基準が下落することや、その基準の大規模な溶解という危険性は、カリスマによって動機づけられた支配関係に影のように付きまとっているが、それを分かりながらその危険性に係る間違いもあると指摘している。一方、ヴェーバーは、正確に規定できず、おろそかにされるべきではない諸現象を包括させた概念である「残余カテゴリー」についても説明している。しかし、ヴェーバーにおいて不信の念や批判を引き起こしたのは、真正の人格的なカリスマである。そして、問題は優先的に社会学的概念と理論の形成の標準モデルへ「躊躇なく」適合するようなパースペクティブや、それからカリスマの問題を考察することである。これには、以下の２つの視点をもつ必要がある。①カリスマ支配が理解社会学上の「社会関係」として解釈されるのであれば、カリスマ支配の描かれ方を究明しなければならない。②そして、その過程や、範囲における社会関係の意味は、社会学上の「解釈的理解」で明らかになるか、いかなる限界がこの理解に対して方法論的根拠から設けられるのかも考察しなくてはならない。

さて、ヴェーバーはカリスマを、支配を可能とし、これを正当化する特定の人間の卓越さとしている。この支配類型は政治的領域に限られるわけではなく、「主張する個人」の「特定の内容命令」が服従へと突き動かし、その服従を当てにできるのであれば支配は語られるとしている。そして、服従への意志は激情的、あるいは価値合理的なモチーフが決定的であり、「服従への意志」がなければ、被支配者の側に立つことはできないが、彼ら自身、行っている行為については理解していると述べている。また、カリスマによって動機づけられた支配関係の下では、世界を根底から変革する全く新しい何かがあることが重要であり、支配の成否は、その証明にかなっている。

しかしながら、このカリスマ的支配を超自然的なものとみなし、科学的合理性という手段では解釈しえない、非合理的なものであると捉える意見もある。この一方で、社会学的理解では、特定の諸前提の下にある人間を、超自然的で、いずれに

せよ経験的・科学的に理解できない諸力の実在性と真理を信じることへともたらすことができる諸根拠に照準を当てているのである。

ヴェーバーはカリスマ概念をまったく価値自由的であるとしたり、それを別の現象形式から引き出すような状況として捉えたりしている。「真正の」カリスマと「作為的な」カリスマの区別を放棄できないのは明らかであり、区別のための評価を事柄における区別から鋭く区切らなくてはならない。

そして、カリスマの場と意義は、本来の「真正の」形式において示され、カリスマは一般的には宗教の歴史、個別的には政治的改革と変革の西洋史の力とみなされる。過去の社会学者たちは、真のカリスマや純粋にカリスマ的な指導者には意味があり、その革命的な力や影響力はどこに基礎づけられるかを実例的に突き付けてきた。ヴェーバーにとってのカリスマは、理念型的な純粋性の「存在形式」の中で姿を表し、他の社会学者の指導要求が「純粋に宗教的に」動機づけられていたことにカリスマは本質に属しているのである。

近年、これまでのヴェーバー的なカリスマ社会学が行ってきた批判的・懐疑的な関わりが、生産的社会の中で、つまり政治、広告、娯楽産業の領域、日常の領域の中で、カリスマの意味と価値がインフレーションを起こしてしまっている。この中で、社会学は「カリスマ主義」の研究の下で、達成可能であるものを顧みず、目の前にある社会的実存性に対する独自の評価によってでもなく、事柄における独自の差異化・分化をもって立ち向かうならば、社会学は当面批判的になる。

ゲオルク・ジンメルは「社会化された存在様式は、社会化されていない存在様式によって規定されているし、その決定に参与している」と述べている。

個別化の存在形式は、ジンメルとヴェーバーとでは平行線上に規定されている。そのため、一方を主題化にすれば、社会学が個－性を一方向的な

左から２番目よりカール･アッハム氏、ヨハネス･ヴァイス氏、姜尚中氏

方法で知覚する。そのため、真剣に受けとるためには、完全には分離されていない事柄を、社会的に一般的なものとして理解する。こうした場合においては、社会学的分析の厳密さが、どれほど現実に即しているのかを測る助けになっている。

以上が、「現代社会におけるポスト合理性の問題――ヴェーバーの遺したもの――」というテーマに基づいた、アッハム氏とヴァイス氏の講演内容である。

（文責：おち･ゆうこ　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）
（2010年11月23日、メトロポリタン・プラザ12階会議室）

シンポジウム全体の概要、及びアンケート結果は28ページをご覧ください。